



磯崎 澄

(株) ユーエスイー・  
ビジネスソリューション

Kiyoshi ISOZAKI [正会員] k-isozaki@use-ebisu.co.jp

1968年電電公社入社、技術局 Captain システム、1988年 NTT データ通信ソフトウェア開発部長、NTT 国際通信社長、NTT コミュニケーション常務、2003年 JSAT (株) 社長、2009年 (株) ユーエスイー・ビジネスソリューション代表取締役社長。



[No.90]

## 超高速開発ツールとの衝撃的出会い

**私**がシステム開発自動化の「超高速開発ツール」と出会ってから、まだ2年です。50年前からシステム開発に携わってきましたが、ここ数十年くらいはシステム開発には直接かかわっていませんでした。その後再度システムの構築・保守運用の事業に携わることになりましたが、一昨年、「超高速開発ツール」のお話と見解を超高速開発ツール関係の協会会長さんから直接聞く貴重な機会があり、「超高速開発ツール」の展開する新しいシステム開発方式の世界とそのインパクトの可能性と今後の影響の大きさに驚愕しました。まさに「浦島太郎」的な「隔世の感」を衝撃的に感じました。

現在でも、多くの中大規模システムは、労働集約的で非効率な昔からの「ウォーターフォール型システム開発方式」で開発し維持管理されています。約40年間のシステム開発の歴史で、CASE ツール、4GL、パッケージ、ERP、部分的自動化ツールなどが工夫・提供されてきましたが、業種・業態によらず広範囲にシステムソフト開発全体を自動化するツールや方式は、なかなか登場しませんでした。現在提供されている汎用的な「超高速開発ツール」は、世界中で約40ツールくらいあるようですが、自動化の工程範囲とやり方はそれぞれに違いはあるものの、いずれも広範囲なシステムソフト開発の自動化に効果的に適用可能で、上記の従来からある効率化ツールとは、本質的に異なります。特に「超高速開発ツール」は、ソフト開発生産性の大幅向上、開発期間の大幅短縮、自動化開発されたソフトのデバッグ不要、この結果としてのシステム開発コストの大幅削減とシステム改修の容易化・スピードアップ化を実現できることは、画期的です。これと共に重要なのは、システム開発と保守運用の労働集約的なワークスタイルを、中上流工程主体の付加価値創造的なワークスタイルへ「画期的に変革」して、IT

業界を今後大きく変革する可能性の実力と影響力を持っていることです。

SI (システムインテグレーション) 企業としては現在、従来型のシステム開発モデルから「ポスト SI ビジネスモデル」へどのように変革・移行していったらよいか、生き残り新たな発展のために問われています。

ユーザサイドも、ネットとスマホ時代では、サービス・商品寿命が短期化し変更・追加が激しい環境となっており、競争を勝ち抜くには、システム変更が短期間、容易でコストも安いことが、従来にも増して熾烈な要求になっています。SI 企業が、従来からあるこれらの本質的課題を解消できなければ、ユーザから見放されていきます。

一方労働環境として、“3K”、“7K”といわれている IT 業界の労働集約的で品質が完璧に問われるワークスタイルが不人気化しつつあります。IT 業界が、再度魅力ある付加価値ビジネスとゆとりある上流指向のビジネスを取り戻すために、色々なポスト SI ビジネスモデル／ワークスタイルの検討と導入が喫緊の課題になっています。私の会社も、これらの課題・問題を危機感を持って認識・痛感し、解決策として「超高速開発ツール」の活用と開発だけでなく保守運用、分析・最適化までのシステム開発・運用全サイクルをぐるぐる回し続ける「DevOps 事業モデル」の事業化を決定し、昨年度から自動化学業本部を立ち上げました。会社の成長の大きな柱にしていきたいと、意気込んでいます。

「超高速開発ツール」群の高度化が世界中で切磋琢磨して取り組まれています。この「超高速開発ツール」に今後 AI が組み合わされると、さらに急激に自動化の適用範囲の拡大と効率化・有効性が進展すると思われます。「超高速開発ツール」の進展には、ますます目が離せない状況だと思います。

(2018年4月11日受付)